



大置 東京女子医大 人工心肺装置

日常的に使用知らず

逮捕の執刀医 危険性も認識なし

東京女子医大病院の心臓手術ミス・隠ぺい事件で、執刀医の瀬尾和宏容疑者(46)が、操作ミスが逮捕の理由で、操作ミスが起きた人工心肺装置について「医局の手術で日常的に使われていることを知らなかった」と周辺に

話していたことが分かった。装置に圧力異常が起きると、血液循環が止まる危険性があることを知っていた医局の医師もほとんどおらず、さまざまな医療体制がミスの背景に浮かんできた。

「ポンプ式」「落差式」「陰圧吸引式」の3種類ある。関係者によると、死亡した群馬県高崎市の平柳明香さん(当時12歳)の手術をした同病院循環器小児外科は従来主にポンプ式を使い、時々落差式も使用してきた。

医師の左藤一樹容疑者(38)は業務上過失致死容疑で逮捕された。隠ぺいされたとされる陰圧吸引式は、事故の約5年前に当時の講師クラスの意向で導入されたという。しかし、瀬尾容疑者は「このタイプを医局が採用して

いたことは、事故が起きて初めて知った。手術前のスタッフ会議でも聞いたことがなかった」と述べていたという。

医局の人工心肺装置作動記録用紙にも「ポンプ式」と「落差式」の記入欄はあるが「陰圧吸引式」の欄はなく、このタイプの導入が周知されていなかったことを示している。

また、医局の複数の医師は毎日新聞の取材に「装置に圧力異常が起きる危険を知らなかった」と話している。

女子医大小児心臓手術事故

人工心肺知らず

2002年7月2日 毎日新聞